

主 文

原判決を破棄する。

本件を大阪高等裁判所に差し戻す。

理 由

被告人本人の上告趣意は、単なる法令違反、事実誤認の主張であり、弁護人木戸
悌次郎の上告趣意は、量刑不当の主張であつて、いずれも刑訴法四〇五条の上告理
由にあたらない。

しかし、所論にかんがみ、職権をもつて調査すると、記録によれば、原審は、第
一回公判期日において、弁護人の出頭はあつたが被告人の出頭がないまま実質審理
を行ない即日結審していることが明らかである。しかるに、同公判期日についての
召喚手続または同公判期日の通知が被告人に対しなされた形跡は、記録上これをま
つたく認めることができない。してみれば、原審の訴訟手続は違法であり、原判決
を破棄しなければいちじるしく正義に反するものと認める。

よつて、刑訴法四一一条一号、四一三条本文により、裁判官全員一致の意見で、
主文のとおり判決する。

検察官梶川俊吉 公判出席

昭和四四年一〇月三日

最高裁判所第二小法廷

| | | | | | |
|--------|---|---|---|---|---|
| 裁判長裁判官 | 草 | 鹿 | 浅 | 之 | 介 |
| 裁判官 | 城 | 戸 | 芳 | | 彦 |
| 裁判官 | 色 | 川 | 幸 | 太 | 郎 |
| 裁判官 | 村 | 上 | 朝 | | 一 |